ソーシャルワーク再考

――クリティカル理論、ポストモダニズム、ポスト構造主義――

田　川　佳代子

はじめに

ソーシャルワークは、歴史的に、社会を変えることへの関心と、社会を維持あるいは統制することへの関心の、相反する理念や価値を内包しつつ展開されてきた。

ソーシャルワークの根本には、変革のラディカルな思考がもともと備わっていたと考える。しかし、大学等でソーシャルワークの教育が行われ、専門職としての社会的地位や承認の要求が高まる頃より、次第にラディカルな視点は周辺へとやられた。

増大し多様化する福祉ニーズへ対応するために、サービスの利用を消費者としての自由な選択と契約と改定し、市場原理を導入、営利・非営利を問わず多様なサービス事業者が参入する福祉サービス供給体制の整備が進められてきた。

経営管理主義が台頭し優勢となるなかで、ソーシャルワークにおける社会変革や社会正義への責任・責務は、疑問符のつくものとなっている（Ife 1997）。

市場における競争や個人主義を容認する一方で、社会正義や平等主義を支持する、いわゆる福祉国家の本質に横たわる反駁する価値の脈絡に、ソーシャルワーカー自身も身を置いている（Banks 1995）。

ソーシャルワークが専門職化していく過程で強い影響を受けたのが、実証主義の哲学である。科学的であることにあらゆる知識を還元する努力を強調するあまり、ソーシャルワークにおける知ること（knowing）から、ケアすること（caring）を切り離す限定的視座の認識がもたらされた（Imre 1982）。

ソーシャルワークが科学的であろうとするなかで、古い科学主義のパラダイムが採用され専門職の養成は進められた。ソーシャルワークに流行の経験主義は、知識と価値の分裂を招き、ソーシャルワークの核となる信念は、経験主義の中で正当な位置を得られていない（Heineman 1981）。

ソーシャルワークの視座として採用される科学主義や価値中立の立場は、ソーシャルワーカーの社会的諸問題の理解や、問題解決の方法、導かれる結果に影響をもつ。

今日のグローバル経済、規制緩和、福祉国家解体の危機を背景として、社会的排除・貧困・不平等（=2005福原・中村）の影響は広範化・深刻化している。その影響は人々の「潜在能力」（=1999 池本・野上・佐藤）を奪い・奪われる社会との諸関係に及ぶ。

このような社会的背景の下、ソーシャルワーカーからは、国家や地理的・文化的境界線を越え、緊張関係のある葛藤を経験している人々の、社会的諸問題を扱うことのできる新たなパラダイムの必要性が訴えられる（Finn and Jacobson 2003）。

過去20年間の歴史的・社会的・知的潮流によって、伝統的ソーシャルワークの理論的基盤は粉砕され、その真実性・信頼性・信用は崩れ去ったとし、Rossiter（1996）は、国家の統制に置かれた専門職の役割をよりクリティカルなものにしようと、ポスト構造主義とクリティカル理論に依拠し、社会正義への関心によって枠づけられる直接的実践を再編する可能性を描いている。

グローバル資本主義から突きつけられる挑戦に対し、変容する社会の傍らで、ただそのシステムへの追従とその政治経済・社会的状態に適応を促すソーシャルワーク実践では、既存のシステムの歪から生じている社会的諸問題の根本的な解決をめざすことは難しい（Mullaly 2007）。構造的アプローチは、個人的諸問題の構造的決定要素に焦点をあて、個人の解放と社会変革の実現をめ

ざすものとして知られる。

しかし、単純な構造分析や決定論は、人々の力を潜在的に削ぎ落とす危うさを併せ持つ。省察的な実践の立場からは、構造的アプローチに対し、世界を説明し意味を付与する人間の主体的・能動的な働きやかかわり・活動を見落している、と批判されている（Pease and Fook 1999; Sewell, W. H. 1992; Schon, D. A. 1983）。

本論文は、まず、ソーシャルワークの置かれている社会的脈絡として、資本主義の政治経済的変容と、グローバル化がもたらす福祉への影響を記述する。グローバル化、規制緩和、福祉国家の危機のもとで広がる社会的排除・貧困・不平等を扱うため、それを生じ固定化する社会構造の分析を表す。

その認識を踏まえ、社会構造からの挑戦や緊張や反駁に直面し、抑圧的な状況下にいる人々の生きづらさや社会的諸問題を取り扱い、その解決に向けて働きかけるソーシャルワークを再考する。具体的には、社会正義への志向性があり、併せてクリティカル理論、ポストモダニズム、ポスト構造主義の思考から構想されるソーシャルワーク理論と実践である（Pease and Fook 1999; Leonard, P. 1997; Rossiter, A. B. 1996; Ife, J. 1997; Finn and Jacobson 2003）。それは搾取・不平等・抑圧的な社会から自由な社会への移行をめざす解放の実践と重なるものであり、伝統的なソーシャルワークに対するクリティカルな分析と、それに代わるオルタナティヴなものの提示を含む。

ソーシャルワークの理論的再編に外すことのできない主題について導きだし、ソーシャルワークの理論的枠組みの構成要素について分析を行う。モダニストとポストモダニストの競合しあう視座のダイナミズム、ポスト構造主義における主体と権力、クリティカル理論、ポストモダニズム、ポスト構造主義から構想されるソーシャルワークを実践に移し対応する際に考慮される主要なテーマについて考察を行う。

Ⅰ．ソーシャルワークの社会的脈絡の変容

１．資本主義の政治経済的変容

戦後の福祉国家は、ケインズ主義とベバリッジ主義の２つの柱に依拠してきた。ケインズ主義は、高い経済活動と完全雇用を確実にする需要重視の経済から国家の介入を支持する。この福祉国家の「経済的な」要素とともに、市場経済の危険要素に対するベバリッジの保険の概念は「社会的な」要素を形成する。全般的意図は、自由主義市場の社会をより生産的、安定的、調和的にすることであるが、暗黙には、経済的・社会的自由放任主義から生ずる構造的不均衡を修正することにある（Mishra 1984: 6–7）。

福祉国家の危機は、1973年 OPEC による石油価格の急激な引き上げによってもたらされた価格の騰貴と景気の後退のなか麻痺状態におかれた国際経済の停滞から始まった（Mishra 1989: 172–3）。

オイル・ショックによって、戦後の好景気を支えた労働統制、テクノロジー、消費性向、政治的 - 経済的権力の布置構成、即ち、「フォーディズム的 - ケインズ的システム」は破綻をする（Harvey =1999: 171）。この経済の再構築や社会的・政治的再調整の時期に、「労働過程、労働市場、生産物、消費様式に関連するフレキシビリティ」に基づく新しい蓄積体制への移行が始まる（Harvey =1999: 198–9）。

激しい競争にさらされる雇用者たちは、弱体化した組合、失業者、不完全就業者の余剰労働者を利用しながら、はるかにフレキシブルな労働体制と労働協約を強いる労働市場の再構築を求めた（Harvey =1999: 201）。

ケインズのやり方はもはや操縦不能となり、通貨政策を第一とするマネタリズムと減税策を通じた供給側重視の経済理論として一新された古典的自由放任主義が返り咲いた（Mishra 1989: 172）。

新保守主義政権は、福祉国家の維持から、撤退へと舵を切った。「経済成長の沈滞という状況下での国際的競争の激化によって、あらゆる国家がいっそう『企業家主義的』になり、有利なビジネス環境の維持に腐心するようになるにつれ、組織労働やそれ以外の社会運動の力を抑制せねばならなくなった。」（Harvey =1999: 222）。

２．グローバル化と福祉への影響

グローバル化とは、商品やサービスの国境横断的な交互作用、国際的な資本の流れ、テクノロジーの急速な普及などを含めた経済の過程と考えられる。国際通貨基金（IMF）によるグローバル化の定義は、次の論点に要約される（Ferguson et al. 2002: 134–6）。即ち、

①資本主義の勝利。②グローバル化と市場の勝利はすべての人々に恩恵をもたらす。③グローバル化は新自由主義イデオロギーの一部とみなされる。④資本主義を拡大し深化させるため、また経済活動を導く原理として、資本の自由な流れ、国家経済と市場の「開放」、経済と労働市場の規制緩和、労働組合の統制を必須のものと考える。⑤国家の介入は必要最小限に留め、市場に干渉せず自由にする、それが最も効率的な配分のメカニズムと

考える（Ferguson et al. 2002: 136）。

グローバル資本主義経済に特徴的な、柔軟な・一時的・不確実な投資や生産・労働や消費の諸条件は、福祉国家の考えに特徴的な普遍的・完全な雇用や平等の諸条件とは合致しなくなった（Leonard, P. 1997: 113）。つまり、自由に流動するグローバル経済は、福祉国家解体の議論を招来する。

「不承不承の福祉解体」（Leonard, P. 1997: 114）に代わり、税制の見直し、社会的賃金や公的支出の削減、サービス供給における民営化や市場の役割強化が、唯一実行可能な選択肢とされる。

グローバル化は、Mishra, R. (1999: 15) によれば、経済的現象であるとともに、政治的・イデオロギー的現象であり、福祉国家の本質的な脈絡となる。福祉に対するグローバル化の影響は、次の 7 項目として問題提起される。即ち、グローバル化は、

①通貨再膨張政策を通して、経済成長と完全雇用の目標を追求する政府の備えるべき能力の土台を蝕む。「一国家におけるケインズ主義」はもはや不可能とみる。

②賃金と労働条件における不平等の増大と下方移動を招く。

③国家政策として政府の借方の削減と減税を優先させ、社会的援護や社会的費用の支出を抑制する。

④国民の連帯する土台を蝕み、報酬の不平等を合法化することで、ナショナル・ミニマムのような社会的援護のイデオロギー的支柱を弱める。

⑤労働組合・雇用者・政府による三者協議や社会的パートナーシップの基礎を弱め、労働者や政府から、資本へ権力のバランスが移る。

⑥「左派の」アプローチを排除し、国家政策を統制する。

⑦グローバル化経済の論理と、国民共同体、民主制政治の「論理」に矛盾が生まれる。グローバル資本主義と民主制国家において社会政策が主要な問題となる。

リーマンショック以降、具体的な問題提起や政策提言を含め、生活困窮者やホームレス支援活動やそのネットワークの全国的な展開がある。当事者性に立つソーシャルアクション、NPO や市民団体の役割や成果に注目が集まる。その傍らで虐待死や孤独・孤立死を伝えるマスコミ報道が続き、行政や専門職の対応にある盲点も浮き彫りにされた。コミュニティを拠点として外国につながる住民や DV 被害者への支援、高齢者・障がい者・子育てに対する生活支援や助け合い活動等、地域を基盤として問題解決をはかる多様な組織の連携・協働の体制の見直しや再編が課題である。

Ⅱ．ソーシャルワークの再考

ごく少数の大企業に資本が集中し、柔軟で融通のきく労働市場が拡大する一方、労働組合は弱体化し、個々の労働者により大きな圧力のかかる仕組みに変えられてきた。こうした社会からの挑戦や緊張や矛盾に直面するために、ソーシャルワークは新たなパラダイムを必要としている。生活や仕事の環境の急速な変化につれて、ソーシャルワーク実践の性格と方向性は基本的な再考が求められている（Finn and Jacobson 2003）。

本研究は、グローバル化、規制緩和、福祉国家の危機のもとで広がる社会的排除や貧困、不平等を見つめ、人々の抱える生きづらさや社会的諸問題を取り扱い、その解決に向けて働くソーシャルワークに関心がある。

それは、搾取・不平等・抑圧的な社会からの解放と自由な社会への移行に関心をもち、伝統的な社会理論・哲学・科学に対する批判分析と、それに代わるオルタナティヴな理論の提示を含むクリティカル理論に依拠している。

解放のディスコースへの志向や、変革やエンパワーメントに関心をもつ社会正義に志向するクリティカル理論は、オルタナティヴ・ソーシャルワークの重要な部分である（Ife 1997: 136）。

クリティカルな伝統は、Addams, J.（=1969）以来の豊富な歴史があるが、社会運動の影響下で明瞭にクリティカル・ソーシャルワークが現れたのは1960年代になってからで、1980年代から90年代にかけて構造的ソーシャルワークや反抑圧的アプローチ・反差別的アプローチの実践モデルが発達した（Healy 2005）。

特に、解放のソーシャルワークの展開は、1970年代のラディカルな批判分析が始まりと言われる（Pease and Fook 1999: 8）。クリティカル・ソーシャルワークの理論的構成要素として、まず、ラディカル・ソーシャルワークの遺産（Mullaly 2007）と称されるものについて振り返る。

1．ラディカル・ソーシャルワークの遺産

オイル・ショック後の1970年代半ばに、英国で Bailey and Brake（1975）のラディカル・ソーシャルワーク、引き続き Corrigan and Leonard（1978）のマルクス主義ソーシャルワーク、合衆国で Galper（1975）の社会主義ソーシャルワーク、オーストラリアで Throssell（1975）のラディカル・エッセイが出版された。

カナダでは、Moreau（1979）によって構造的アプローチと名付けられ、90年代後半、Mullaly（1997）のなかで

理論的枠組みが再編された。カナダの構造的アプローチは、クリティカル・ソーシャルワークとほぼ同じものと考えられる（Rossiter 1996）。

ラディカルな批判分析、構造的アプローチ、クリティカル・ソーシャルワークに共通するのは、伝統なソーシャルワークを、犠牲者非難もしくは現状維持の企てとみなすところにある（Fook 1993; Payne 1997）。

Mullaly and Keating（1991）は、多様なラディカル・ソーシャルワークの哲学的、理論的、実践的な一致と不一致を調べ、類似性と差異を分析した。類似性には次のものが挙げられる。

①社会主義のあり方に賛同し、資本主義を拒否する。

②社会問題の原因を個人の欠陥や家族の逆機能、下位文化と捉えず、資本主義社会の下での搾取・疎外・抑圧によって階級・ジェンダー・人種・年齢に沿って生み出された不平等が構造化されたものと考える。そのため、技術的・行政的な改良、即ち、自由主義的な改良主義を拒否する。

③資本主義の福祉国家を政治機構の部分として既存の社会秩序である資本主義を支える装置と捉える。

④資本主義に対照的な社会規範、即ち、社会福祉の社会主義モデルを提示する。

⑤伝統的ソーシャルワーク実践は、社会問題を個別化し、治療と適応を促し、社会統制の役割を担うもので、抑圧的な経済社会秩序を維持し、社会問題を永続させるものと捉える。

⑥伝統的ソーシャルワークにおける個人対社会の二分法を誤りとみる。個人的なものは政治的なものという前提に立ち、私的な諸問題とその諸問題にある構造的なつながりを強調する。心理社会的介入のみではなく、社会の政治経済的脈絡への介入を求める。

⑦社会における抑圧の原因として家父長制（と人種差別主義）の無視があったことを認める。フェミニスト分析による洞察、すなわち性差別主義や家父長制（・人種差別主義）が社会・家族・市場・福祉国家のあらゆる社会制度を構造化するという、事実の解読による分析をラディカル・ソーシャルワークに組み込む。

⑧抑圧の原因として家父長制を無視していたと同様、人種差別主義や反人種差別主義への不注意があったことを認める。その認識を組み入れて以降、奴隷制度・大量虐殺・植民地・帝国主義の支配の歴史を根拠に、人種差別主義を組織的な支配と非人間化の究極の形として認識する。

⑨「専門職主義」への不信がある。専門職主義をソーシャルワーク実践の技術的側面を強調し、政治的側面を覆い隠すものとみる。専門職は、国家と協力提携下にあり、国家の承認と引き換えに、人々に抑圧的な施策を操り、サービス利用者との関係において、ソーシャルワーカー自身の地位や機能を棚上げにするとみられる。社会・職業的階層の不平等や個人主義に依拠した実践によって、資本主義・人種差別主義・家父長制の価値を支え、社会構造に焦点化しないというメッセージを伝える。専門職主義は「他者への奉仕」の倫理を掲げながら、実は自己奉仕と個人的・社会的・経済的・政治的権力を追求するものとみなされる。

他方、多様な見解のあるラディカル・ソーシャルワークは、社会的な転換を図るための処方において差異があり、社会民主主義、革命的マルクス主義、進歩的なマルクス主義（民主主義的な社会主義）の3つの社会主義の視座に分かれる。ソーシャルワーカーは、現在の社会福祉体系のなかで働くのか、あるいは外側に留まるのか、また、資本主義社会の抑圧と疎外の一次的原因が何であると考えるのか、さらに、社会の転換を図る戦略として個人的なものと政治的なものをどう優先させるのかについて、其々の見解を異にしている（Mullaly and Keating 1991）。

隅広（2010: 45）では、ラディカル・ソーシャルワークの構造的な分析視座は余りに抽象的で一般的であるが、ポストモダンの視座を取り入れることで、異なる文化や異なる集団が経験する多種多様な差異を考慮することが可能となり、今日のクリティカル・ソーシャルワークの展開につながると述べられる。

また舟木（2007: 57）は、ラディカル・ソーシャルワークからクリティカル・ソーシャルワークへの変遷は、「西欧社会全体のラディカル・ソーシャルワーク言説の衰退の影響および研究者による政治的な戦略であった」と説明される。

2．クリティカル理論

クリティカル理論は、客観的知識や科学的規範によって築かれる社会科学や、政治的実践から独立した伝統的社会理論とは違い、Leonard, Stephen（1990: 3）によれば、「社会に関するクリティカル理論は実践的意図をもつ理論」と定義される。

クリティカル理論では、社会的学問は社会変革の役割を果たすと考えられ、社会の底辺にいる人々のエンパワーのため、彼らに利用できる洞察と知的道具を提供し、解放を助け、世界の変革に携わる（Leonard, S. 1990: xiii）。

既存の社会・経済・政治的制度と実践の批判分析を含

み、それらの変革を探求する構造的ソーシャルワークは、クリティカル理論である（Mullaly 1997: 109）。

今日のクリティカル・ソーシャルワークは、マルクス主義的・構造主義的なモダニストの視座とそれを否定し差異と多様性を重視するポストモダニストの視座を併せもち、反駁のあるものであるが、一つの理論としてその両立を可能にさせるのがクリティカル理論と言われる（隅広 2010: 45; Ife 1999: 211–213）。

クリティカル理論には、モダニストとポストモダニストによる競合する 2 つの視座がある。この 2 つの競合する視座とクリティカル理論について述べる。

1）モダニストの視座

モダニストの視座によれば、真実は理性によって導かれ、未来はつくられ、世界に意味と目的を吹き込むのは人間の活動である。万物を調べ、論証し、洞察し、推測し、それが何でつくられ、どのように働くかを理解し、説明し、統制し、用い、利用する。人間は、もはや物質的世界から完全に切り離されたと考えられる（Howe 1994: 514–15）。

モダニストのクリティカル理論では、実証主義における科学主義を拒否する。科学は知識を獲得するための唯一の方法であり、客観的に検証されうる事実こそが正当な知識であるとする考えを拒む。知識の創造主体と客体とを完全に分離できるとは考えず、むしろ人間の解放にとって理論と実践は不可分なものであると考えられる。

Habermas (=1982) は、「人間の科学が構成過程の分析である限り、それは、必然的に、科学の認識批判的な自己反省をふくんでいる」と述べる（p. 57）。

普遍的原理によって自然と社会的世界を築こうとするとき、真実の支配者は、権力の名の下、差異を廃する（Howe 1994: 521）。モダニストの普遍的真実の主張には、女性や非ヨーロッパ人、従属階級の経験や知識は排除される（Leonard, P. 1994: 14）。クリティカル理論の立場は、構造的諸問題、特に、階級、ジェンダー、人種のあらゆる形態に横たわる共通の抑圧と支配を認識する。

2）ポストモダニストの視座

ポストモダニストは全体理論を批判する。普遍的なものについて語ろうとするモダニストの要求は様々な抑圧を否定するが、ポストモダニストは他者を卓越するような支配システムは何も存在しないと考える（Pease and Fook 1999: 11）。

ポストモダニストの中心的な主題の 1 つは、世界を理解し「現実」を解釈することにおいて単一の合理性、ディスコース、ナラティヴを否定することである。これは社会科学と人間理解に決定的な影響をもたらした（Ife 1996: 85）。

ポストモダニストのモダニティ批判は、社会福祉に新たな視座の発展と方向性を与える（Leonard, P. 1995: 17）。Leonard, P. (1997) は、ポストモダンの世界から福祉を再考し、解放のプロジェクトとして再構築を試みる（Leonard, P. 1997: 32）。

社会福祉における支配的なディスコースは、右派に傾倒してきた。実在する社会主義の崩壊という環境の下で、社会主義的なアプローチには、より一層の自己批判と多様性への配慮が求められる。普遍的主張への懐疑、確かさや絶対的真実の追求というよりは、むしろ対話への関心が高い。ポストモダンの感性によってのみ、対立する諸派、いわゆるフェミニスト・社会主義者・反人種差別主義者・その他、右派の社会福祉政策に挑戦する人々の間の連帯感のようなものを築くことが可能であると言われる（Leonard, P. 1995: 17）。

他方、多元的現実を認めることから、ポストモダニストは、社会正義に通じる抑圧の概念から注意をそむけ、一貫した政治的施策を欠くと批判される（Rossiter 1996: 29）。

ポストモダニストのクリティカル理論の立場は、人種差別主義や性差別主義や植民地主義に反対する政治的闘いに関心を持つ。ポストモダニズムの「強い」「極端な」形態は、規範的な批判主義や多様性を強調するスタンダードさえも拒む。しかし、クリティカル理論の知識を授かったポストモダニズムの「弱い」形態は、政治的行動と社会正義に関心のある解放のポリティックスの構築に貢献しうると考えられる（Pease and Fook 1999: 12）。

3）構造分析――モダニズムとポストモダニズムの強みを生かす

モダニストのクリティカル理論の強さは、構造的諸問題、特に、階級、ジェンダー、人種のあらゆる形態に共通する抑圧と支配を認識するところにある。

構造分析は、資本主義、家父長制、人種主義の社会における人々の地位を理解し、ノーマライズを促す。それは人々に原因があるのではない状況から彼らを解放するのを助ける。そして、他に抑圧された諸個人や集団と連帯し集合的行動を共にする可能性を導く。言い直せば、構造分析は個人的なものと政治的なものを結びつけ、抑圧の個人的経験を広範な政治的理解と関連づける可能性をもつ（Mullaly 1997: 115）。

構造分析に対するポストモダニストの貢献は、たとえ抑圧や搾取が普遍的な現象であっても、異なる脈絡、異なる場、異なる人々によって、異なって経験されるという認識をもたらしたことにある（Mullaly 1997: 115–6）。

フーコーの思想は、ポストモダニズム的議論の豊富な源泉である。中心的なテーマは権力と知である。フーコーは、権力が究極的に国家の内部にあるという考えを打ち破り、さまざまな場所、文脈、社会的状況における権力諸関係のミクロな政治を調査した。社会的統制に用いる知のシステムと、特定の地域的な文脈内での支配との間にある密接な関係を論じる。監獄、収容施設、病院、大学、学校、精神科医の事務所などは拡散し断片的になっている権力構造が編成される場として示される（Harvey =1999: 70）。

Mullaly (1997) の構造的ソーシャルワークにおいては、クリティカル理論における 2 つの視座――モダニストとポストモダニストを完全に二分化あるいは両極化したものとはみずに、おのおのをもう一方がもたない強さや限界をもつものとみる。そして、おのおのの強さをもう一方の限界や反駁を修正するものとして用いられる（Mullaly 1997: 115）。

3．ポスト構造主義

構造的アプローチは、政治・経済的秩序が社会問題に直接寄与するという仮説に立ち、実践の目標は、既存の構造を社会正義・平等主義・人間主義に基づいた新たな秩序に変えることにおかれ、社会的・物質的諸条件やイデオロギーに関心がある（Mullaly 1997; Lundy 2004）。

構造的アプローチは、個人的諸問題を構造的な不正義の結果とみる。社会福祉制度の対象者は、不平等な社会関係の犠牲者と理解され、制度を変える介入が擁護される（Bailey and Brakem 1976; Galper 1975; Coates 1992）。

これに対し、あまりに政治的でありすぎるとか、非現実的な構造改革である等、その実行可能性を疑問視する声は決して少なくない。そして人間を個人や社会の変化の過程に参加できる行為者としてではなく、構造的不平等の犠牲者として強調することへの重要な批判がある。

> 構造主義者は、ヒューマン・エージェンシー、創造性、経験への意味付与能力に評価の余地を残さない歴史的唯物主義を採用してきた（Finn and Jacobson 2003: 62）。

現代世界の複雑さや反駁、不確かさは、単純な二元論として、権力を持つ者とそうでない者、利益を受ける者とそうでない者、抑圧する者と抑圧される者、搾取する者と搾取される者というように、相互に排他的な区分で捉えきれるものではない。クリティカルな省察から、ポストモダニズムやポスト構造主義への接近がある（Pease and Fook 1999）。

Rossiter (1996: 27) は、ポスト構造主義が与える、社会的なものから個人的なものを切り離すのではない主体（人々）の理論的基礎が、解放のソーシャルワークについての自身の思考にどう役立ったかを述べている。

ポスト構造主義の理論では、個人は社会的過程によってつくられ、順に社会組織をつくると仮定する。言語はこの構成過程に決定的なものである（Rossiter 1996: 27）。ポスト構造主義者は、アイデンティティそれ自体、「ディスコース」を通して社会的に構成されると考える（Rossiter 1996: 28）。

Foucault, M.（=1977）の主張では、「権力に有益な知であれ不服従な知であれ一つの知を生み出すと想定されるのは認識主体の活動なのではない、それは権力―知〔の係り合い〕であり、それを横切り、それが組立てられ、在りうべき認識形態と認識領域を規定する、その過程ならびに戦いである。」（32頁）Rossiter (1996: 28) によれば、ポスト構造主義者が、構造主義者の陥った袋小路、即ち、外在する社会的部門によって押し付けられ、抑圧される個人を克服するのは、主体であることの創造と理解を通してである。

また、Rossiter (1996: 29) は、援助の学問分野を社会統制の業務を実施する専門職と名付ける Foucault, M. の主張（*Discipline and punish*. New York: Vintage 1979）をとりあげ、ポスト構造主義の理論によって、権力の組織の中に我々自身の地位を理解する手法が与えられたと述べる（Rossiter 1996: 29）。権力と援助が織りなされる現場で、ソーシャルワーカーはどう自らの地位を最善に操縦することができるかが問われている。ポスト構造主義への批判は、解放の企てにもかかわらず、政治的施策を欠く点と、言語以外に、現実の説明は真実とも普遍とも考えない相対主義に対しなされる。

Ⅲ．考察

今日のソーシャルワークの主流は、Germain (1973) によって生態学的メタフォーが導入されて以来、エコロジカル・システム視座が、個人・家族・集団・地域の実践で採用されてきた（Germain and Gitterman 1995）。生態学的見地からの実践は、適応的な能力を高め、人の環境、人と環境の交互作用を高めることに志向している（Germain 1979: 8）。

エコ・システムのアプローチでは、社会的環境という中立的な概念に依拠し、異なる集団間における目標や利害の葛藤、権力関係には注目しない。システムの改革よ

りも秩序の維持を強調し、適応こそが実践の目標とされている。構造的アプローチの支持者は、このような特性と方向性をもつシステム・モデルを批判する（Finn and Jacobson 2003; Mullaly 1997: 124）。

これに代わるオルタナティヴ・ソーシャルワークは、グローバル化、規制緩和、福祉国家の危機のもとで広がる社会的排除・貧困・不平等を生み固定化させる社会構造からの挑戦、葛藤や緊張に直面し、搾取や不平等、抑圧的な社会から自由な社会への移行をめざす解放の実践をめざすものとなる。

クリティカル理論、ポストモダニズム、ポスト構造主義の思考から実践を再概念化する際、主体の回復（Giddens =1989）は主要なテーマである。すべての社会的実践は、コミュニケーション、権力、サンクションの３つの要素を伴う。意味の構成・コミュニケーションおよび規範的サンクションは権力の行使と結びつけられる（Giddens =1989: 88–9）。

検討してきた、クリティカル理論におけるモダニズムとポストモダニズムの競合する視座のダイナミズムは、社会正義に方向づけられるソーシャルワークの理論的枠組みを構成する要素となる。

実践の枠組みの構成要素となる、人間行動は、所与の社会的・文化的秩序によって束縛される（『構造』の用語に圧縮される）だけではなく、人間行動によって構造がつくられ、構造を再生産し、変える（Ortner 1996: 2）。

構造的世界の認識を踏まえ、実践では、相互作用と対話の過程を通じて、ラディカリズムに固有の理論的限界を克服し、社会的・経済的・文化的アレンジメントの分析、権力と知の関係を批判的に読み解く（Pease and Fook 1999）。

クリティカル理論、ポストモダニズム、ポスト構造主義から構想されるソーシャルワークを実践に移すとき、主体（人々）、社会的文脈、権力、対話は、主要なテーマといえる。これらの認識・理論的テーマに沿ってなされる具体的問いは、ソーシャルワーカー自身の批判的思考を形成する。これは伝統的なソーシャルワークとは異なる様式の実践の枠組みを形成する。

主体（人々）：人間は、能動的に意味を発展させ新たにつくり変える行為の主体である。Finn and Jacobson（2003: 70）によれば、すべての人は意味をつくり、その場所で形成されたレンズを通して自らの経験と世界を意味づけする。そして、他者とのかかわりの過程は、意味を発展させ、再創造し、挑み、交渉し、肯定する。それゆえ、意味の探求は省察の過程を必要とする。現実の当然視された仮設を問い、多元的で競合する解釈の検討を求める。特に、差異の対話は、異なる視座と関心を結びつける可能性をもつ。

Finn and Jacobson (2003: 73) で言及される具体的問いは、実践上のイメージの基礎を与える。現在の福祉政策や実践に織り込まれている用語（例えば「家族」等）の意味と、ソーシャルワーカー自身のこれらの言葉の理解とは適合するだろうか。この意味はクライエントの経験や理解とどう異なるだろうか。クライエントは自分の状況をどう意味づけているか。ソーシャルワーカーは、クライエントとの見解をどう妥当なものとするのか、また自身の視点をどう伝えるのか。

社会的文脈：社会的文脈は、不平等な支配構造が存在し、その構造の再生産が行われる大きな社会的・経済的・政治的枠組みの中の諸個人・諸集団・諸組織の相互作用・諸関係と認識される（Finn and Jacobson 2003: 70）。

この脈絡から、クライエントとソーシャルワーカーの相互作用はどう形成されるのだろうか（Finn and Jacobson 2003: 73）。また、階級、ジェンダー、障害、セクシュアリティに関連する構造的な社会過程は、社会的サービスを利用する人々の社会的抑圧の経験にいかに影響を及ぼすのだろうか（Healy 2005: 219）。

権力：権力は、人間関係を通じて行使される諸力である。現実の定義を統制し、現実を再定義し、交渉しようとするところに権力関係がある。

Finn and Jacobson (2003: 73) は、次の具体的問いを示す。クライエントの生活に影響を与える決定を行い、実施する権力をもつのは誰なのか。ソーシャルワーカーは、この状況の中でどのような権力をもち、それをどう分かちあうのか。クライエントはどんな権力をもち、どう実行するか。

対話：対話は、主体、社会的文脈、権力の思考のなかで行われる。Finn and Jacobson (2003: 73) で言及される「発展の可能性」は、対話の目的と重なる。クライエントの見解や声はどう確認されるのか。クライエントの生活に影響を及ぼす決定に、クライエント自身が意味のある参加者となるにはどうしたらいいのか。立場上、制約があるなかで、ソーシャルワーカーは権利擁護をどう実践するのか。どう限界に挑むのだろうか。

これらの、主体（人々）、社会的文脈、権力、対話のテーマに沿う、クリティカルな問いと省察的実践（Schon =2009）は、新たな知の生成に有効なものである。

おわりに

グローバル化、規制緩和、福祉国家の危機のもとで広がる社会的排除・貧困・不平等を扱い、社会を変えるため、ソーシャルワークの置かれた社会的脈絡である、資本主義の政治経済的変容と、グローバル化がもたらす福祉への影響についての認識を示した。

社会構造からの挑戦や緊張や反駁に直面し、抑圧的な状況の人々の生きづらさや社会的諸問題に対応するソーシャルワークは、クリティカル理論に依拠し、搾取・不平等・抑圧からの解放となる実践と重なり、伝統的なソーシャルワークに対する批判分析と、新たな実践の枠組みによって形成されることを述べた。

階級、民族、ジェンダー、障害のあらゆる形態に共通する抑圧と支配の構造的諸問題を認識するモダニストのクリティカル理論と、たとえ抑圧や搾取が普遍的な現象であっても、異なる脈絡、異なる場、異なる人々によって、異なって経験されるというポストモダニストの認識を確認し、再評価をした。

個人的なものと政治的なものを結びつけ、抑圧の個人的経験を広範な政治的理解と関連づける可能性をもつ構造分析は、ソーシャルワークの理論的再編に組み込まれるべきものである。しかし、構造主義は、人間を個人や社会の変化の過程に参加できる行為者というよりは、むしろ構造的不平等の犠牲者を強調することに批判的省察が求められる。ポスト構造主義が、構造主義の陥ったこの袋小路である、抑圧される個人を克服するのは、主体の回復を通してである。

クリティカル理論、ポストモダニズム、ポスト構造主義から構想されるソーシャルワークの実践の枠組みは、これまでの様式と異なる。主体（人々）、社会的文脈、権力、対話のテーマに沿う、クリティカルな問いと省察的実践（Schon =2009）に依拠する。

今後、様々な事例研究を通して、ソーシャルワークの新たな理論的枠組みの再構成と実践の枠組みの形成を行うことが課題である。

付記

本研究は、独立行政法人日本学術振興会科学研究費助成金（基盤研究 (C) 課題番号：23530734）を受け実施した研究の一部をまとめたものである。

文献

Addams, Jane (1910) *Twenty Years at Hull-House: With Autobiographical Notes,* New York Macmillan.（=1969, 柴田善守訳『ハル・ハウスの20年：アメリカにおけるスラム活動の記録』岩崎学術出版社）

Bailey, Roy and Brake, Mike (1975) *Radical Social Work*, Pantheon Books.

Banks, Sarah (1995) *Ethics and Values in Social Work*, Macmillan.

Bhalla, A. S. and Frederic Lapeyre (1999, 2004) *Poverty and Exclusion in a Global World*, 2nd edition. Palgrave Macmillan.（=2005, 2009, 福原宏幸・中村健吾監訳『グローバル化と社会的排除　貧困と社会問題への新しいアプローチ』昭和堂）

Coates, J. (1992) Ideology and Education0 for Social Work Practice, *Journal of Progressive Human Services*, 3 (1), 15−30.

Corrigan, Paul and Leonard, Peter (1978) *Social Work Practice under Capitalism*, Macmillan.

Dominelli, Lena and McLeod, Eileen (1989) *Feminist Social Work*, Palgrave.

Ferguson, Iain, Lavalette, Michael and Mooney, Gerry (2002) *Rethinking Welfare*, Sage Publications.

Finn, Janet L. and Jacobson, Maxine (2003) Just Practice: Steps toward a New Social Work Paradigm, *Journal of Social Work Education*, Vol. 39, No, 1, 57−78.

Fook, Janis (1993) *Radical Casework A Theory of Practice*, Allen & Unwin.

Foucault, Michel (1975) *Surveiller et Punir: naissance de la prison.* Éditions GALLIMARD. (=1977, 田村俶訳『監獄の誕生：監視と処罰』新潮社）

舟木紳介（2007）「オーストラリアのクリティカル・ソーシャルワーク理論における正義概念とポストモダニズムの影響」『社会福祉学』48巻3号、55−65.

Galper, Jeffry H. (1975) *The Politics of Social Services*, Prentice-Hall, Englewood Cliffs.

Galper, Jeffry H. (1980) *Social Work Practice A Radical Perspective*, Prentice-Hall, Englewood Cliffs.

Germain, Carel B. (1973) An Ecological Perspective in Casework Practice, *Social Casework*, 54, 323−330.

Germain, Carel B. (1979) Intrduction: Ecology and Social Work, Carel B. Germain Editor, *Social Work Practice: People and Environments*, Columbia University Press.

Germain, Carel B.and Alex Gitterman (1995) Ecological Perspective, *19th Encyclopedia of Social Work*, NASW Press, 816−824.

Giddnes, Anthony (1979) *Central Problems in Social Theory*. (=1989, 友枝敏雄・今田高俊・森重雄訳『社会理論の最前線』ハーベスト社）

Gilligan, Carol (1982) *In a Different Voice*.（=1986, 生田久美子・並木美智子訳『もうひとつの声』川島書店）

Greif, Geoffrey (1986) The Ecosystems Perspective 'Meets the Press', *Social Work*, 31, 225−226.

Habermas, Jurgen (1968) *Erkenntnis und Interesse*.（=1982, 奥山・八木橋・渡辺訳『認識と関心』未来社）

Harvey, David (1990) *The Condition of Postmodernity*, Blackwell Publishers.（=1999, 吉原直樹監訳『ポストモダニティの条件』青木書店）

Healy, Karen (2005) Under Reconstruction: Renewing Critical Social Work Practices, Hick, Steven, Fook, Jan, & Pozzuto, Richard Edited, *Social Work A Critical Turn*, Thompson Educational Publishing, 219−231.

Heineman, Martha Brunswick (1981) "The Obsolete Scientific Imperative in Social Work Research", *Social Service Review*, September, 371−397.

Howe, David (1994) Modernity, Postmodernity and Social Work, *British Journal of Social Work*, 24, 513−532.

Ife, Jim (1997) *Rethinking Social Work*, Longman.

Imre, Roberta Wells (1982) *Knowing and Caring: Philosophical Issues in Social Work*, University Press of America.

Leonard, Peter (1997) Postmodernism, Socialism and Social Welfare, *Journal Progressive Human Services*, Vol. 6 (2), 3−19.

Leonard, Peter (1994) Knowledge/Power and Postmodernism, Implications for the Practice of a Critical Social Work Education, *Canadian Social Work Review*, Vol. 11, 11−26.

Leonard, Peter (1995) Postmodernism, Socialism and Social Welfare, *Journal of Progressive Human Services*, Vol. 6 (2), 3−19.

Leonard, Peter (1997) *Postmodern Welfare: Reconstructing an Emancipatory Project*, Sage Publications.

Leonard, Stephen (1990) *Critical Theory in Political Practice*, Princeton University Press.

Lundy, Colleen (2004) *Social Work and Social Justice*, broadview.

Mishra, Ramesh (1984) *The Welfare State in Crisis*, Harvester Press.

Mishra, Ramesh (1989) Riding the new wave: social work and the neo-conservative challenge, *International Social Work*, Sage, London, Newbury and New Delhi, Vol. 32, 171−182.

Mishra, Ramesh (1999) *Globalization and the Welfare State*, Edward Elgar.

Moreau, Maurice J. (1979) A Structural Approach to Social Work Practice, *Canadian Journal of Social Work Education*, 5, 1, 78−94.

Mullaly, Bob (1997) *Structural Social Work Ideology, Theory, and Practice*, Second Editon, Oxford University Press.

Mullaly, Bob (2007) *The New Structural Social Work*, Third Edition, Oxford University Press.

Ortner, Sherry B. (1996) *Making Gender*, Beacon Press.

Payne, Malcolm (1997) *Modern Social Work Theory*, Second Edition, Palgrave.

Pease, Bob and Fook, Jan (1999) Postmodern critical theory and emancipator social work practice, Pease and Fook Edited, *Transforming Social Work Practice*, Routelege. 1−22.

Rossiter, Amy B. (1996) A Perspective on Critical Social Work, *Journal of Progressive Human Services*, Vol. 7 (2), 23−41.

Schon, Donald A. (1983) *The Reflective Practitioner*, Basic Books. (=2007, 2009　柳沢昌一・三輪建二『省察的実践とは何か』鳳書房)

Sen, Amartya (1992) *Inequality Reexamined*, Oxford University Press. (=1999, 2006　池本幸生・野上裕生・佐藤仁訳『不平等の再検討 潜在能力と自由』岩波書店)

Sewell, William H. (1992) A Theory of Structure: Duality, Agency, and Transformation, *American Journal of Sociology*, 98(1), 1−29.

隅広静子（2010）「クリティカル・ソーシャルワークにおける『クリティカル』概念の整理の試み―ソーシャルワーク教育に必要なクリティカル・シンキングの概念確立のために」『福井県立大学論集』第34号、43−55.

Rethinking Social Work

—Critical Theory, Post-modernism and Post-structuralism—

TAGAWA Kayoko

This paper first discusses on the social context surrounding social work. I overviewed the political and economic transformation of capitalism as well as the influence of globalization on welfare, and analyzed the social structure that created and immobilized social exclusion, poverty and inequity expanding under globalization, deregulation and crisis of the welfare state.

Social work is to face challenges, tensions and oppositions from social structure and cope with difficulties in living for people under an oppressed situation and various social problems. It relies on critical theory and overlaps the practice to achieve deliverance from exploitation, inequity and oppression, and is created under the framework of new practice along with critical analysis toward traditional social work.

Dynamism of two competing perspectives: (1) critical theory by modernists who recognize various structural problems of oppression and control common to various forms of classes, races, genders, disabilities, ages and sexualities and (2) critical theory by post-modernists that even if oppression or exploitation is a universal phenomenon, it can be experienced in different ways, in different contexts, at different places and by different people; and is definitively important to the theoretical framework of social work seeking socialism.

Structural analysis with the possibility to connect personal matters with political matters or to relate personal experiences of oppression to an extensive political understanding is incorporated into the basis of theoretical reorganization of social work. However, structuralism is criticized since it concludes that people are victims of structural inequity rather than performers who can participate in the transformation process of individuals or society. Structuralism fell into the dead end of this “oppressed individual,” which could be overcome by post-structuralism through recovery of the main body.

The framework of practice of social work envisioned from critical theory, post-modernism and post-structuralism becomes something different from the form of social work in the past. Critical questioning as well as study on the reflective practice that goes along the theme of the main body (people), social context, authority and conversation is effective to generate a new wisdom on social work.